

浮世絵版画の主な絵具 *は春信の版画によく用いられていると考えられる絵具

【赤系】

*①紅＝紅花を原料とする色料で、紅絵、紅摺絵、錦絵時代の最も好まれた赤である。そのままでは黄色味が強く、これを精製する過程が必要となる。精製の度合いが高いものは本紅と呼ばれ、最も純粋な赤色を示すが、大量の紅花から一握りしかできない非常に高価な色料であった。

*②ベンガラ（紅殻、弁柄）＝もともとはインドベンガル地方の鉄分（酸化第二鉄）の多い土を用いた色料であったが、江戸時代には日本でも人工的に造るようになった。

③丹＝鉛に硫黄と硝石を加えて焼き精製した鉛丹。発色の強いオレンジに近い色となる。初期浮世絵版画で墨摺に丹を筆彩したものを丹絵という。比較的安価に流通したもののか。

④洋紅＝万延期（1860, 61）頃に浮世絵に導入された舶来の化学染料アニリン。明治浮世絵を象徴する主要な赤色となり、この色を主要色とした浮世絵は赤絵とも呼ばれた。

【黄色系】

①鬱金（うこん）＝薬としても用いられていたショウガ科の多年草の根から取り出した染料。最もよく使われたか。

*②藤黄（とうおう）（雌黄）＝東南アジア原産のガンボージの樹脂を原料とする色料で、中国を経由して輸入されるため高価であったと思われる。透明感のある発色のよいレモン色のような黄色は美しい。

③棠梨（ずみ）＝棠梨の樹の皮を煎じた色。

④黄蘗（きはだ）＝黄肌の樹の皮を粉にした色。

⑤石黄（雌黄）＝天然硫化砒素化合物の顔料。

【青色系】

①藍（本藍）＝蓼藍を発酵させて作る‘すくも藍’から作られる。藍瓶に浮いてきた藍の泡（藍花）を固めて藍蠟（藍棒）という形にして、水で溶いて使用されるものであるが、浮世絵では古い藍染の布片を煮て得た藍を藍蠟としたものを使っていたともいわれる。

*②露草（藍紙）＝露草の花の汁を紙に染み込ませたもの（藍紙／青花紙）を、使う時には水にしみ出させる。着色しても、水や湿気に退色し易い色で、紙に湿り気を与えて摺る浮世絵版画では扱いの悪い色である。しかし長年保管された藍紙は退色しにくい。紫には紅との混色で専ら露草が用いられたらしく、その色合いが好まれたものと思われる。

③ペロ藍（ペロリン藍）＝幕末に日本に舶来された化学染料で、発色のよい透明感のある青色を示す。ペロ藍は、天保期（1830-44）より本格的に江戸の浮世絵に使われはじめた。大量に輸入されはじめると価格も下がり、扱いがよく退色しにくいこの青は、本藍や露草に取って替わり、その後近代に至るまで主要な青の色料となった。

【その他】

*鉛白＝鉛から精製した白色。比較的上製の錦絵に用いられることが多い。

【本発表関連 浮世絵界の動向】

時期	主な浮世絵界の動向
宝暦 10(1760)頃 明和 1-2(1765)年	鈴木春信、細判紅摺絵の役者絵でデビューか。この年の絵暦交換会流行。旗本大久保甚四郎(俳名：巨川)を中心に、絵暦交換会が流行。春信は多く絵暦制作を依頼される。錦絵の創始。春信美人画で第一人者になる。
明和 5-6(1768-9)年	春信、この頃町の評判娘や遊女など実在の女性を題材とした美人画が多くなる。
明和 7(1770)年	春信没。
明和末 安永期(1772-1781)	勝川春章を中心に役者似顔絵が興隆してくる。 磯田湖龍齋がこの時期を代表する美人画の絵師に。「雛形若菜初模様」のシリーズで大判錦絵も手がけるようになる(主流は中判錦絵)。
天明期(1781-89)	磯田湖龍齋が錦絵からほぼ手を引き肉筆画に専念 鳥居清長はじめて大判錦絵を手がけるようになる。代表作が多い。(作品数としては中判錦絵が多い)
天明 3(1783)年	版元蔦屋重三郎日本橋通油町に出店
天明 4(1784)年	清長、大判錦絵の続絵制作が目立ってくる。
天明 5(1785)年	鳥居清満没
天明 7(1787)年	清長、鳥居家四代目を継ぐ。錦絵の作画量が減少。番付、絵看板の制作に集中したか。
天明末 寛政期(1789-1801)	役者大首絵の出版が本格的に始まる。 喜多川歌麿が美人画で第一人者となる。
寛政 2(1790)年	改印制度はじまる。
寛政 4-5年	歌麿の美人大首絵が人気に。
寛政 6(1794)年	東洲斎写楽の活躍(5月から翌年正月の芝居に取材した作品まで)
寛政 9(1797)年	蔦屋重三郎没(48歳)
文化 3(1806)	歌麿没(54歳?)
文化 12 (1815)年	清長没(64歳)

【参考文献】

- 阪本寧男 落合雪野「アオバナと青花紙—近江特産の植物をめぐって 淡海文庫(13)」(1998年 サンライズ出版)
- 下山進「鈴木春信「坐鋪八景 台子夜雨」と「三十六歌仙 紀友則」に使用された着色料について」(『青春の浮世絵師 鈴木春信 江戸のカラリスト登場』図録 2002年 千葉市美術館)
- 拙稿「春信版画の紙と色-雅の謎」(同上)
- 拙稿「春信版画の版行と普及」(『浮世絵芸術』148号 2004年 国際浮世絵学会)
- 下山進「鳥居清長作品に使用された着色料の非破壊分析調査」(『鳥居清長 江戸のヴィーナス 誕生』図録 2007年 千葉市美術館)